

# 武道参加への期待と成果

## ～武道教室に所属する子どもの保護者に着目して～

スポーツマーケティングゼミナール 1314045 服部 史歩

### 1. 研究動機・研究目的

武道は、平成24年度より全国の中学校で必修化され、武道を通しての礼儀作法の獲得や相手を尊重する態度の形成、伝統的な行動を守ること等を学習の目的としている。また、武道教育では人がより良く生きるための方法・原理を習得し活用することが求められ、文部科学省(1996)が推奨している「生きる力」の獲得を促進する一つの要因となることが期待される(山本・中井, 2012)。この「生きる力」に極めて類似する概念として、ライフスキルがあり(上野, 2008)、ライフスキルの形成は青少年の健全な人格形成につながると考えられている【(JKYB 研究会, 1996) 元嶋 (2014) 参照】。また、空手道が2020東京五輪で新種目に追加されたため、武道に対する期待と注目度は、以前に比べ高まっているといえるだろう。しかし、日本体育協会によると、スポーツ少年団に登録をしている武道の団員数の割合(平成28年度)は、サッカーや軟式野球などに比べ低い値を示していた。また、全日本柔道連盟、全日本剣道連盟によると小学生の会員数もここ数年減少傾向である。注目度とは裏腹に競技人口がなかなか増加しない現状がある。そこには、武道の持つ暴力性に対し、保護者が不安を感じているという理由がある。武道はこのようなマイナスイメージを持つが、武道に参加している子どもは存在する。伊藤(2012)によると、武道を始めるきっかけの75%が保護者の意向であることが報告されている。しかし、子どもに習い事を始めさせる動機の研究はいくつかあるものの、武道という領域に限定している研究は見当たらない。また、武道に焦点を当てたライフスキルの研究は少ない。そこで本研究では、武道教室に子どもが所属している保護者に対し質問をおこない、武道参加のきっかけや実際に武道教室に通わせることにより、子どもにどのようなライフスキルが身についたと感じたのかを明らかにする。

### 2. 研究方法

本研究は、2017年10月11日(水)から11月10日(金)に郵送及び直接配布による質問紙調査をおこなった。4歳から15歳の子どもが通う茨城県内の武道教室3ヶ所の保護者をターゲットとした。調査用紙の配布数は、3ヶ所合わせて117部配布し、回収率は約93.2%、有効回答数は、約97.2%(N=106)であった。質問項目は、元嶋・坂入(2014)の「学校体育における武道関連ライフスキル尺度」を参考に作成した。個人的属性は保護者と子どもの2つに分け設定をした。保護者は、年代、武道経験の有無、武道名、その他競技経験の有無、競技名、子どもとの続柄の6項目を設定した。子どもは、年齢、性別、武道歴、現在おこなっているその他の競技、競技名、参加をしている武道教室の活動頻度の6項目を設定した。基礎項目は、子どもが武道を始めたきっかけ、子どもが道場に通うことにより何を期待したのか20項目、子どもが武道を経験したことにより成果を上げたなどの効果を感じたのかの有無、子どもが道場に通うことによりどのようなことが身についたと感じたのか20項目で構成した。分析において統計パッケージであるIBM SPSS Statistics 21を用いて分析をお

こなった。すべての項目について単純集計をおこない、全体の傾向を把握した。はじめに保護者の個人的属性について、子どもとの続柄、武道歴、武道以外の競技歴の単純集計をおこなった。子どもの個人的属性も同様に単純集計を用いて、性別、年齢、現在おこなっている武道名、武道歴、活動頻度、現在おこなっているその他競技について分析をおこなった。

### 3. 主な結果と考察

武道参加のきっかけは、「子ども自身の希望」(43.4%)が最も多く、次いで「母親が薦めた」(40.6%)、「父親が薦めた」(20.8%)であった。先行研究において、武道参加のきっかけは「知人の紹介」が最も多いが、本研究では「他の保護者に誘われた」は4.7%、「子どもが友人に誘われた」は3.8%であり、「知人の紹介」によって武道を始めた子どもは少ないことが分かった。期待について保護者は、「共感」や「リーダーシップ」よりも「礼儀」や「精神力」のスキル獲得を期待していた。また、子どもの性別、保護者の武道経験別にそれぞれt検定をおこなったが、どちらも有意差はみられなかった。成果については、期待と同様に「礼儀」や「礼節」に関わる項目の平均得点が高かった。この2項目に関しては、期待が成果として表れていると言えるだろう。なお、子どもの性別間に有意差はみられなかった。期待と成果を比較したところ、10項目において成果よりも期待の方が高い値を示しており、期待したほどの成果を保護者はまだ実感していないと推測できる。また、5つのライフスキル因子について同様に比較したところ(表1参照)、全ての因子において期待が成果よりも高い値を示していた。そのうち、「礼儀」「精神力」「前向きな思考」において統計的に有意な差があった。また、スポーツ全般において獲得が期待されている「共感性」や「リーダーシップ」に関しての期待値は低かった。武道には「礼にはじまり礼に終わる」という言葉があるように、保護者は武道に対し「礼儀」や、苦しいことがあっても努力できる「精神力」や「前向きな思考」の獲得を大いに期待していると推測できる。一方で、期待以上の成果を実感している保護者が少ないことがわかった。

### 4. 結論

武道だからこそ獲得が期待される「礼儀」「精神力」「前向きな思考」を武道教室はさらに生かしていくべきである。また、成果に関しては厳しい評価が多かった。その理由の一つに、保護者は自分の子どもへの評価が厳しくなるという側面があるからではないだろうか。そこで、武道教室は子どもの成長した部分などを保護者とコミュニケーションをとり共有することや、目に見えて分かるような機会を設け、成長や成果を実感してもらうことが大切になるだろう。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導、ご協力を受け賜りました。心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

#### 主な引用参考文献

元嶋菜美香・坂入洋右(2014) 学校体育における武道関連ライフスキル尺度の作成と妥当性及び信頼性の検討